

風が運ぶ想い

風が運ぶ想い

辻明音

今は昔、葵の将軍が治めるころのことです。

このころ、尾道のまちはひとときわ榮えていました。船やものが絶えずやってきましたから、それはもう活気で満ちあふれていたのです。

そんな尾道のまちには、長い時を生きた大クスノキの精が住んでいました。源の幕府ができたころに生まれ、人を愛するがゆえに人のすがたを真似し、尾道のまちを見守りつづける艮神社の大クスノキの精です。

しかし近ごろ、大クスノキの精はひどく悩んでいました。にぎやかなまちとは反対にため息ばかり

りです。

そんなとき、大クスノキの精の古い友だちである潮風が、久しぶりにこのまちへ吹きもどつてきました。

「やあ、オオクス。久しぶりだな」

潮の香りをばらまきながら、くると一まわり。大クスノキの精に合わせて人のすがたになった潮風は、笑ってあいさつをしました。けれど大クスノキの精は「ああ……こんなにちは、潮風さん」と元氣なく返事をします。潮風はすっかり驚いてしまいました。

「一体どうしたんだ？ オオクス。ずいぶんと落

ち込んでいるが……。一体何があったのか、俺に話しちゃあくれないか？」

心配そうに潮風がそう聞くと、大クスノキの精はため息のあとに答えました。

「……友だちが、ずっと悲しんでいるんです」

それから大クスノキの精は、うつむいてしまいました。ますます心配になって、潮風は大クスノキの精に聞きます。

「悲しんでいる？ 一体どの友だちなんだ」

大クスノキの精は、すぐに答えました。

「浄土寺のお山の、不動明王さんです」

「ああ、あいつか！」

潮風は手を打ちました。浄土寺のお山に彫られた大きな不動明王さんは、潮風の友だちでもありました。夜になるとまちへ下りてくる彼と、潮風と、それから大クスノキの精とで集まって、いっしょに語りあったことが何度あったでしょうか。まだ若く血氣さかなな不動明王さんは、潮風が旅

してきた話をひどく楽しそうに聞いてくれました。

した。しばらく会っていませんが、潮風がその時のことを忘れたことはありません。ですから、潮風は首をかしげました。

「どうしてあいつが悲しんでいるんだ？ あんなに明るいやつだったのに」

そう聞く潮風に、大クスノキの精は悲しそうな声でひとこと。

「僕のいちばん高いところに昇って、耳をすましてみてください」

そう言うって背後の大木を指さすと、またうつむいてしまいました。

「一体、オオクスのやつはどうしてしまったんだ？」

不思議そうにしながらも、潮風は大クスノキの精が言うようにしました。お山のほうから吹く風にゆられて、葉がしやしやら音を立てます。言

われたとおりに昇りきった友人の一番高い枝からは、あたりがよく見えました。とおい浄土寺のお山もです。

久しぶりのまち並みを見わたしてから、潮風は耳をすませました。山のほうからくる風が、潮風の耳をくすぐってゆきます。そうすると、あちこちで葉がこすれる音のなかに別の音が聞こえはじめました。どうやらそれは、だれかの声のようです。これは浄土寺の山の方から聞こえているのかと気づいた潮風は、おどろきました。

——あいつは着いてきたただけなんだからのにあいつが斬られちゃった

あの時、おれが忘れたせいで！

——ああ、どうにかあの夜に戻れないもんなかなあ
聞こえてきたのは、あまりに悲しい泣き声だった

よね」

「ああ、夜な夜な一人で飲みあるいていたな。元気なもんだと思っていたが……それがどうしたんだ？もしかして、今はそうじゃないのか」

ありえない、と言わんばかりの潮風に、大クスノキの精はうつむいたままうなずきました。

「……ええ。信じられないかもしれないませんが、今はもう不動さんがお山を下りてこられることはありません。……ご自分から、出てこないことを決めてしまわれたんです」

かなしげな大クスノキの精の言葉に、潮風は思わずだまりこんでしまいました。潮風は楽しみにまちの話をする不動明王さんを覚えていましたから、おどろいてしまったのです。しかしすぐに、大クスノキの精へこう聞きました。

「……一体、どうしてそんなことに？そんなにものつらいことだったのか」

すると、大クスノキの精は顔を上げてうなずき

たのです。

潮風はすぐにてっぺんから飛びおりて、大クスノキの精に聞きました。

「オオクス、あれは一体どうしたんだ？あの声は……不動のやつじゃないのか」

大クスノキの精は一つうなずきました。

「ええ、あれは不動さんの泣き声です。ああやって毎日……山からの風につて届くんですよ」

「そんな……」潮風はくりりと目を見ひらきます。「あれが毎日なんて、なぜそんなことになったんだ。なぜあんなに苦しうに……」

とまどう潮風に、大クスノキの精はまたうつむいて答えました。

「潮風さんがいらつしやらない間、不動さんについて答えたんです」

「……つらいこと？」

「はい。……潮風さんは、不動さんが夜のまちのにぎわいとお酒が大好きだったのを知っています

ました。

そしてそのまま、”つらいこと“について語りはじめたのです。それは、あまりにかなしい話でした。

「事件がおきたのは、ある月のきれいな夜のことです。いつもどおり不動さんはまちへ下りていくとしました。ですがその日は、めずらしく近くに住んでいたお地蔵さまもいっしょだったんです。いつも道ばたに立っているだけのお地蔵さまに、まちのにぎわいを教えてあげたくなったからとおっしゃっていました」

「それは……不動のやつらしいな」

「ええ、本当に不動さんらしくて……よい話だと思います。……けれどこれが、悲しみのはじまりだったんです。

……お地蔵さまを手のひらに乗せて、不動さんは大きな一歩ですぐにまちへたどり着きました。そして、お地蔵さまに言ったのです。『しばらく遊

んだら落ちあおう』。お地藏さまがそれにうなずいて、お二人は分かれて飲みあるきにきました。たのしく飲んだあとは、二人つれだって帰る約束をしたんですね。

ですが……酔った不動さんは、その約束を忘れてしまいました。そのまま一人で帰ってしまったんです。……これが、不動さんの大きな失敗でした」「失敗……というのは？」

「……潮風さん、不動さんがまちへ下りる道にお役所があるのを知ってらっしゃいますよね」

「ん？ ああ。きびしい役人がいると聞くが……まさか」

「……はい。そのまさか、です。お地藏さまはお一人で帰ろうとして、お役所のまえを通りました。お酒をたくさん飲んだあとですから、ふらふらと……そこをお役人に見つかってしまったのです。怒ったお役人は、お地藏さまの首をはねてしまいました。不動さんが約束を思いだしてもどつ

がどうして悩んでいるのか、ようやくわかった。……これは、とても悲しいな」

潮の香をふくんだ風が、悲しい風の音をおしかえして葉をゆらします。大クスノキの精は泣きだしそうな顔をして、けれどすぐに笑顔をうかべました。

「ええ、とても悲しい話だ。……けれど、あなたに話せてよかった。これでもう、大丈夫です」「……大丈夫？」

思いもよらない笑顔と言葉に、潮風はいくつか目をまたたきました。いったい何が大丈夫かどうかでしょう。ふしぎそうにする潮風の空いた手をとって、大クスノキの精は言いました。

「はい。……あなたとなら、きつと彼の心をなくさめる方法が見つかる気がするんです」

潮風の目をまっすぐに見つめて、大クスノキの精はつづけます。

「僕はいつも、神さまのお側でまちの人たちをな

てきたのは、ちょうどその後です。

二つに分かれたお地藏さまの首と体を見て、不動さんは自分のおこないをひどく後悔しました。もうしゃべることのない小さな友だちを今度こそつれて帰って、住まいの近くの土に埋めて……それからしばらく、山を下りてこなくなってしまうのです」

そう言い終えて、大クスノキの精はだまりこんでしまいました。潮風も、すぐには言葉ができません。しばらくこのまちへ吹きつけなかったうちにそんなことが起こっていたなど、にわかには信じがたかったのです。けれど、先ほど聞いたのはたしかに友だちの声でした。

潮風は山からの風が吹くほうを一度だけ見て、つづけて息を一つはいて、それから大クスノキの精の頭をそつとなでました。

「……話してくれてありがとう、オオクス。お前

ぐさめるお手伝いをしました。だから不動さんを、大切な友だちをなくさめてあげたい。

……そのために、あなたに手伝ってほしいんです。いっしょになぐさめる方法を考えて、遠い不動さんのもとへ届けてほしい。山からの風が悲しみをはこんでくるのなら、海からの風である潮風さんが幸せをはこべば良いのではないかと思うんです」

「オオクス……」

潮風を見つめる大クスノキの精はあまりに真剣でした。ですから潮風は、その目をまっすぐに見つめかえして言ったのです。

「当然、手伝うとも！ あいつは俺の友だちでもあるからな、精いっぱい楽しい風を吹かせてやるさ。……なに、木の精のお前と風の俺がそろうんだ。きつと出来ないことなんてない」

力強い潮風の言葉に、大クスノキの精は安心したようにほほ笑みました。もう悩んでため息ばかり

りついていたときの、暗い顔ではありません。つられて潮風も明るく笑いました。そんな笑いあう二人のまわりで、すずやかな風が境内を流れ、重くしげっていた葉をかき分けて光がさしこみまです。やさしい陽の光を浴びて、さっそく二人はなぐさめの方法を考えはじめました。

「心をなぐさめるもの……なにがよいでしょう」
「……なかなか思いつかないもんだな」

決意を固めたはいいものの、大クスノキの精と潮風はしばらく首をひねっていました。しかし、しばらくして潮風があることを思いついたのです。

「そうだ、オオクス。音曲なんかはどうだ？」

「音曲……ですか？」

「そう、音曲だ。『音曲は心を動かす』とどこかで聞いたことがある。だからきつと、音曲の力で

あいつをなぐさめることもできるんじゃないか」
そう言われて、大クスノキの精はほほ笑みました。大クスノキの精も、音曲は何度も耳にしたことがあります。まちのひとびとが神さまにさげするそれは、とても心にのこっていました。これは良い案かもしれません。

「では、どんな楽器が良いですか？」

その大クスノキの精の言葉をきっかけに、二人はさまざまな楽器を出しあいました。

「そうだな……笛はどうだ。風の音のようで良いと思うが」

「鈴もありますよ。葉のすれるような音が美しいです」

「それなら太鼓も良いな。あれはよく響くんだ」

「……ああ、それならお琴も良いと思います。弦の音は軽やかで気持ちが良いですし……」

そうやっていくつも楽器が思いつきましたが、ふいに大クスノキの精がこまった顔をして潮風に聞

きました。

「……けれど、どうやって音を奏でましょうか？

ふつうの楽器というわけにもいきませんし」

「ん？ ああ、たしかにそうだな……」

大クスノキの精も潮風も、人のすがたをとつてはいますが人ではありません。ふつうの楽器をどこからか取ってくるわけにもいきませんし、そもそも小さな楽器の一つや二つでは足りない気がします。

また考えはじめた二人ですが、ふと大クスノキの精が何かを思いだしたように声を上げました。

「どうした？ オオクス」

「いえ……そういえばこのあいだお参りにいらした方が、『最近、千光寺のお山で太鼓の音を聞いた』と言っていたのを思い出しました」

「山から太鼓の音？ どういうことだ」

首をひねる潮風に、大クスノキの精は答えます。

「くわしくは知らないのですが、ときおり太鼓を

叩くような音が山の上でするそうなんです。岩場のあたりと言っていましたね」

「ふむ……何か手がかりになりそうだな。よし、行ってみるか！」

「そうですね、行ってみましょう」

大クスノキの精の返事を聞いてから、潮風は右手を振り上げました。たちまち、海のほうから強い風が吹きはじめます。それにひらりと乗った潮風は、大クスノキの精の手を取って軽くひとつ飛びました。するとあつという間に、二人は空のはるかに高いところまで舞い上がることができたのです。

そんなまちをはるか下に見下ろせる空中からは、目指す場所がすぐに見つかりました。

「あの大岩のあたりか？」

「はい、おそらく」

「よし、降りるぞ」

岩の上におりたつた二人は、思わず声を上げました。
「この岩、すごく立派だな」

「たしか……大坂のお城で石垣を作るのに、切りだされなかった石だったと思いますよ。ほら、あそこにノミの跡があります」

大クスノキの精が指さした先には、たしかにノミの跡がありました。感心した潮風でしたが、すぐに首をかしげます。

「そりゃあすごい。たしかに平らでよい石だな。……しかし、どうして切りだされなかったんだろうか？」

「たしか……大きすぎて運べなかったからではないでしょうか」

二人でそう話していれば、ふいに後ろから笑い声がありました。おどろいた二人が振りかえると、先ほどまでいなかったはずの少年が岩に座っています。さらにおどろく二人に、少年はもう一度笑ってから跳ねるようにしゃべりだしました。

「小石で？……こうか」

潮風は、大岩の精の言うようにしました。すると、ぼん、ぼんとまるで太鼓を鳴らしたような音が響きわたったのです。これには、潮風も大クスノキの精もおどろきました。その顔をみて、大岩の精は得意げに笑います。

「どうだ？　すごいだろ！　おれの体は楽器みたいに鳴らせるんだぜ」

「これは……本当にすごいですね」

「ああ、ちゃんと太鼓の音だぞ。ほら、オオクスも」
言われるままに、大クスノキの精は小石をつかんで大岩を叩きます。すると、先に鳴ったものと変わらない軽やかな音が鳴りました。改めて、潮風が感心の声をあげます。そんな二人の反応を見て、大岩の精はふいにつぶやきました。

「な、おれ大きいだけじゃないだろ？……けどさ、そんなふうに楽しんでくれたのってあんただけなんだよな」

「おどろかせちゃまって悪いな、潮風さまにオオクスさま！　おれはあんたらの立ってる大岩の精だぜ。あんたらのように、人のすがたをとってはいるけどな。……ところであんたら、ずいぶん面白い話をしてるな」

「……面白いこと、言っていたか？　俺たち」

「さあ……」

思わず顔を見あわせる二人に、岩はまた笑って言いました。

「してたぜ。この岩は大きかったから、って話。

……おれはそれだけの岩じゃないのに」

「……それだけじゃない？」

その言葉が気になった大クスノキの精は、岩肌をなでながら首をかしげます。それに大岩の精はくすぐったそうな声音で答えました。

「おう、そうだぜ。ほかの岩じゃあできないことがおれにはできるんだ。ほら潮風さま、その小石でこの岩を叩いてみてくれよ」

「そうだったのか？」

「ああ。ほらおれ、さっき言われた『城の石垣になりそこねた大きな岩』って知られてるばかりでさ。こうして音が鳴るって知ってるやつはいないから」

そこまで言って、大岩の精はまち並みを見下ろしました。その横顔は、どこか悲しげです。

「でもおれは、みんなが楽しめることを知ってほしいんだ。色んな人に叩いてもらってさ、ただ大きいだけじゃないって知ってほしい。

……それで近ごろ自分で鳴らしてはみたんだけど、やつぱりあんまり聞いてくれるやつはいないんだよな。

だからさ、あんたたちが喜んでくれてうれしいよ」
言いきって大岩の精が浮かべた人なつこい笑みをみて、ふたりは顔を見あわせ、うなずきました。クスノキの精が聞いたうわさの正体は、この大岩の音だったのです。それも、だれかを楽ししま

せたいという音です。

それなら、ふたりがやるべきことはもう決まっています。

「なあ、岩の子。お前は自分が音を奏でられることを、だれかに知ってほしいと思ってるんだな？」

座る大岩の精のまえにしゃがみ込んで、潮風はそう問いました。問われた大岩の精は、ふしぎそうな顔はしましたが力強くうなずきます。潮風は明るい笑みを浮かべました。

「……それじゃあ、ちようど良い」

「ちようど良い？ 何がだよ」

いぶかしげな顔をする大岩の精に、潮風は笑って「俺とオオクスから、お前にたのみたいことがあるんだ」と返します。それにつづけて、大クスノキの精が口を開きました。

「僕たちはいま、音曲を奏でたいと思っています。遠くで悲しんでいる友だちを、なぐさめるために」

来るなんてなあ」

そうして、につこり笑ってこう続けたのです。

「分かった、あんたたちを手伝うよ。おれの音色、しっかり使ってくれ！」

満面の笑みで放たれた大岩の精の答えを聞いて、大クスノキの精は心からうれしそうに笑います。そして、同じように満足げな笑みを浮かべた潮風は言いました。

「さて、それじゃあ一つ……やってみるとしうか」

それからしばらくのことです。尾道のまちには、とあるうわさが広まりました。

「千光寺山に『鼓のように鳴る』岩がある」といううわさです。

ついこの間の満月の夜、千光寺山のほうから澄んだつづみの音を聞いた人がたくさんいたという

「……音曲を？」

「はい。そのために、あなたの力が必要なんです。だれかを楽しめたいと願うその音なら、きつとどこまでも響かせることができるから……」

そこで話をきいて、大クスノキの精は潮風にしたように、大岩の精の手をとりました。

「だからどうか、僕たちに力を貸してくれないでしょうか」

「俺の風にお前の音を乗せて、まち全体へ届けるんだ。……お前の音を知らないものも、誰ひとりなくしてやるさ」

追って潮風も言葉をつなげます。全てを聞きおえた大岩の精は、いくつか目をまたたいて黙りこんでしまいました。

大クスノキの精と潮風は、しずかに大岩の精の言葉を待ちます。

しばらくして、大岩の精はつぶやきました。

「……おれの音が、誰かのしあわせを作るときが

のが、うわさの始まりでした。

そして実際に何人がうわさを確かめに行くと、本当につづみの音が鳴る大岩があったのです。その岩はかつて大阪城の石垣になりかかった岩でしたので、「なんとふしぎですばらしい岩なのだろう」と改めて人びとのうわさになりました。

それからというものの、大岩にはたくさんの人がおとずれるようになりました。今まではとくに名前もなかったのですが、ふしぎな現象をもとに「鼓岩」という立派な呼び名も手に入れました。もう、まちにその岩のことを知らない人はほとんどいないほです。

それからもう一つ、この岩にまつわるうわさがひそかに生まれていました。

それは「潮風をつよい日の夜には、鼓岩がひとりでに鳴る」というものです。しかも、その音にはふしぎな力がありました。

なんとその音色を聞いた人々は、ふしぎと楽しい気持ちになってくるというのです。たとえば、その日にたくさんいやなこと、辛いことがあったとします。けれど、つづみの音を聞くとそれをすっかり忘れてしまうのです。そんなふしぎな力が、夜中の音色にはあるというのでした。

しかもこの音、人だけが力をもらったわけではありません。

鼓岩から遠くはなれた、浄土寺のお山。巨石に彫られた不動明王さまが、その軽やかな音色を聞いて涙を流していたというものがいたのです。また、艮神社の近くを通りかかったものが、浄土寺のお山から吹きかえす風に「ありがとう」という声を聞いたという話もあります。なんともふしぎな話ですが、人びとは

「きつと不動明王さんも、このつづみを楽しんでいらっしやるのだ」

と、うわさし合ったそうです。

そんな中、艮神社では境内一の大クスノキが潮風に枝葉をゆらしていたと言います。その姿はまるで、つづみの音に合わせて舞い踊っているようでした。

さて、今日もまた、海の香りを抱いた風がつよく尾道のまちに吹きつけます。

ですから今宵もきつと、鼓岩の音がまちに響くでしょう。潮風にのって軽やかに舞うクスノキの葉と共に、広く、広く、どこまでも。

そのなかに、もしかすると聞こえてくるかもしれません。

——元氣を出して

——いつかまた、共に遊ぼう

——ああ、ありがとう

そんな、風が運ぶ想いたちが。囀